

楊維楨論

要 木 純 一

「元の中世に、文章の鉅公の、浙河の間に起る有り。鉄崖君と曰う。声光殷殷として、霄漢を摩挲す。呉越の諸生の多く之に帰すること、殆ど猶お山の岱を宗とし、河の海に走るがごとし。是の如き者四十余年にして乃ち終る。」

楊維楨（一二九六—一三七〇）、字は廉夫、号は鉄崖。浙江諸暨の人。ここに引用したのは、同じく、元来明初に活躍した文学者であり、政治家としては明太祖洪武帝のブレインとして活躍した宋濂が、楊維楨の訃報を知らせた彼の門人に対して、書き与えた墓誌銘の冒頭である。（『鉄崖先生古楽府』四部叢刊本付録『元故奉訓大夫江西等処儒学提举楊君墓誌銘』また『宋学士文集』四部叢刊本卷十六）宋濂がかくのごとく高らかにほめたたえる程に、元末の（江南）文壇は、一斉に楊維楨になびいたのである。彼のその魅力は一体どのようなものであったのだろうか。その一端について、本稿は述べたい。

まず、楊の作品及び人物に対して、もつともわかりやすく解説しているものとして、吉川幸次郎氏の『元明詩概説』の楊維楨の部分をいくつか引用する。（『吉川幸次郎全集』15四三三頁〜四四〇頁）

「十四世紀前半の政治史は、小康の時期である。……蒙古人の統治の下においてではあるけれども、平和が中国の全土にあった。」この平和が、「南方、ことに楊子江下流域における市民の詩の成熟」をもたらす。南宋に発端をもつこの市民の詩は、従来「小さな生活を歌う小さな詩に終始した。」「しかし市民たちは、だんだん高度の詩を求めようになった。日常的な題材と感情とで詩を作るのにあきたらず飛翔を欲した。こうした期待に応じて現われたのが、この

時期の特異な詩人、楊維楨である。彼は市民の間から出て、市民の新しい詩の指導者となった。「一三二七、……三二歳でベキンの科挙に及第し、出身地の浙江で、しばらく税務官吏をつとめたが、すぐ辞職し、あとは各地の詩社の指導者として、自由で放恣な生活をたのしみつつ、七十五年の生涯を終った。」「彼が志すのは、華麗で、放恣な、空想に富む詩であった。」「その祖述した詩は、「樂府」「李白と李賀」「いずれも北宋以来、久しく閑却されていた文学である。」「彼の作品は「常識のかきねをおしやぶった自由奔放の詩である。」「そうしてその生活も、その文学のごとく、自由に潤達であった。」「楊維楨は、その文学と生活の奇矯さ、ないしは奇怪さのために、『文妖』文学の邪道、という批評をも、やはりのち明五朝の重臣となった王禕（筆者注、実は王彝。後述。明初の重臣たることは同じ）から受けている。しかし多数の市民は、彼を指導者とあおぎ、その文学に追隨した。」「長いきした彼は、明の太祖朱元璋が即位すると、その政府にめし出され、仕官を強要されたが、かつて元に仕えたことを理由として、拒絶し、「処士としての帰郷をゆるされた。」「そうして一三七〇、洪武三年、七十五歳。市民の詩人としての生涯をとじた。」

概説として、まことにバランスのとれた、過不足のない作品、人物評価であり、本稿も結論はこれ以上のものとならない恐れがあるが、これらの評価の含蓄を今一つ深く掘り下げて考えてみたいのである。

楊維楨の奇矯さが、吉川氏の概説のごとく、彼を論ずるものの第一の話題となっている。それは、当時の文壇においても、楊維楨といえは、あの天下の大奇人だという具合に、もてはやされた話題であった。

宋濂の墓誌銘に曰う。「或いは華陽巾を戴き羽衣を披し、画舫を竜潭・鳳州中に泛べ、鉄笛を横たえて之を吹く。笛声雲を穿ちて上り、之を望む者は、其の謫仙人為るかを疑う。晩年は益々曠達たり。玄圃・蓬臺を松江の上に築き、日として寶無きは無く、寶として沈酔せざるは無し。酒酣なわにして耳熱するに当たり、侍兒を呼びて出でしめ、白雪の辞を歌わしむ。君は、自ら鳳琶に倚りて之に和し、座客或いは踟躕して起ちて舞い、顧盼して生姿あり。（？）儼然として普人の高風有り。」奇妙な格好をして、遊び狂う人物像を描いているが、これはまだ穩当な方である。

最も、過激で、嫌悪を催させるほどの奇人ぶりを記述するものとして、陶宗儀の「輟耕録」巻二十三の次のくだりが

ある。「楊鉄崖は声色を耽好す。筵間に於いて歌兒舞女の纏足纖小有る者を見る毎に、則ち、其の鞵くつを脱がしめて盞を載せて以て酒を行ゆらす。之を金蓮盃と謂う。」後には、くつを直接盃にして酒を飲むという伝説までも生れた。この話柄は、江南の文士の間では、つとに有名であつたらしい。至正丙申（一三五六）の自序を冠する、鄭允端なる女性詩人の「肅籬集」（「涵芬楼秘笈」所収本）に、筆者には作られた背景がよくわからないのであるが、「王夫人の席上にて作る」という注のついた「碧甯」なる詩があつていう。「笑う可し狂生の楊鉄笛、風流何ぞ用いん鞵盃を飲むを」

ただここで気をつけなければならないのは、これらの奇矯が、楊維禎の人と為りに対する尊敬の気持を帯びて語られてゐることである。宋濂の墓誌銘が、彼をほめたたえてゐるのは、いうまでもない。生来きまじめであつた宋濂は、楊の奇行を弁護していう。「蓋し君は、数は奇にして諧は寡し。（めぐまれぬことをいう）故に特に此（奇行）に託して、以て依隠玩世する耳。（韜晦すること）豈に其の本情ならん哉」彼の演技であつたらうといふのである。陶宗儀も実は楊を畏敬してゐるのであり、さきの金蓮盃の話も、非難ではなく、「この人にしてこの癖あり」といふような慨嘆とともに記してゐるのである。「予窃かに其の厭う可きを怪しむ。後に張邦基の墨莊錄を讀むに、王深輔道の双覺詩を載せて云う。……」その詩には金蓮盃に類することが詠まれていた。「此の詩を觀れば、則ち老子の疎狂は、自よつて來たるもの有り矣。」その気ままなように見える行爲も、ちゃんと故事來歴があつてのことだといふのである。

楊維禎の文字の奇怪さに対する非難としてよくひかれるのが、次の「湧幢小品」（明、朱国禎）卷十八「文淫妖」の一節である。「布衣の王彝、字は宗常。操行有り。文を為つくること経術に本づく。会稽の楊維禎は、文を以て四海に主盟す。彝は独り之を薄ちかんじて曰く、文は道を明らかにせず、而して徒だ色態を以て人を惑わし人に媚ぶ。所謂、文に淫する者也。文妖數百言を作り之を詆そす。洪武の初め、召されて元史を修す。」楊維禎が文妖と評せられた典拠となる事柄である。王彝は、楊を輕蔑したわけであるが、これとても、その氣持の裏には、彼の實力を恐れる氣持があつたらうことが読みとれないか。或いは、敢えて楊にさからうことによつて、我が名を挙げようという下心もあつたかもしれない。この「文妖」といふ作品を、我々は今、四庫全書珍本三集に収める「王宗常集」によつて、全文を讀むことが出来る。長くなるが、引用して解説する。（卷三）

「天下の所謂妖なる者は、狐なる而已矣。而して文に妖有り焉。又狐に過ぎたる者有り。夫れ狐は、俄かにして女婦と爲る。而して世の男子、不幸にして焉に惑う者有り。皆懼りて謂いて女婦と爲す。而して相与しむに室家の道を以てすれば、則ち固より、其の黛緑朱白柔曼傾衍の容にして妖たる所以の者、至らざることを無きを見る。故に之を眞の女婦と謂う也。然りと雖も、以て人と爲せば則ち人に非ず。以て女婦と爲せば女婦に非ず。蓋し室家の道の狡獪にして以て幻化する者也。此れ狐の妖たる所以也。」

「文なる者は道の在る所。抑も曷爲れぞ妖たる哉。浙の西に文を言う者有れば、必ず、楊先生と曰う。余、楊の文を觀るに、淫辞快語を以て、仁義を裂き名実を反し、先王の道を濁乱す。顧つて乃ち柔曼傾衍黛緑朱白にして狡獪幻化し、奄焉として以て自ら媚ぶ。是れ狐にして女婦なれば、則ち宣なる乎、世の男子なる者の之に惑うや。余は故に曰く、会稽の楊維植は、文狐なり。文妖なりと。」

「噫、狐の妖たる、人の身を殺すに至る。而して文の妖たる、往往にして、後世の小子をして、群趨して競習せ使む。其の以て斯文の爲に禍いたるに足ること、淺少に非ず。文にして妖たる可き哉。然れども、妖は、固より文に非ざる也。蓋し、男子にして惑わざる者有らん。何ぞ憂えん焉。」

ここで氣をつけなくてはならないことは、この論が、楊維植の文学全般に対するものではなくて、その文章に対する者であるということである。したがって、後世の我々が楊維植のもつとも特徴的なものと見做す、鉄崖体と呼ばれる樂府や詩の作品群は、この文章では埒外においているものと考えてよい。というのは、王彝は、まさに、この「文妖」という文章それ自体によつて、楊維植の文章の魅力に対抗しようという意図があつたであらうからだ。非常に、いわば肩に力の入つた文章だと筆者は思う。狐が女に化けて男をだます話から楊維植の文章に論を移す。意想外な展開。「奄焉として以て自ら媚ぶ。是れ狐にして女婦。」という論理が急展開する部分などは、狐がパツと女に変身する姿と微妙に楊維植をだぶらせて、あたかも楊先生は狐の変化だというような奇妙な効果を追求しているように思える。奇で以て、楊維植の奇に打ち勝とうとしているのだ。だが果して打ち勝てたであらうか。肩に力が入りすぎていると筆者は思う。狐が人を化かすという前段の論理の進め方はあまりにくどすぎないか。「妖たる所以」という語が二度く

り返してあるが、文章をすつきりさせるために、前の方はいらぬのではないか。訓読文に完全にとりいれることはできなかつたが、不要な助字が多すぎる。助字によつて、何とか文章に強いリズムを与えようと苦心しているように思う。このくどさは、可笑しさやユーモアをねらつたものではあるまい。その裏には、王彝の強い不安が隠されている。『湧幢小品』にあるような軽んじて齒牙にもかけないという態度ではなくて、相手の実力を認めた上で、力の限り戦おうとする勇みが、この文章には感じられる。楊維楨は、文の狐であり、文の妖怪である。しかし、世の男子が、あたかも美女に化けた狐を恋するがごとく、彼の文章にひきつけられるのも、「宣なるかな。」邪道であつても、一世を風靡する魔力が彼にあるのは認めざるを得ない。でも、邪道である以上、楊維楨を是としない君子もいるはず、長続きはすまい、きつと大丈夫だろう、という不安逡巡が、筆者にはすけて見えるのであるが。

要するに、奇といつても、社会のはみ出しものの愚行や、気ままなその場かぎりの疎狂ではなく、同時代の人は、その奇行の背後に何かを読みとつていた。宋濂は韜晦隱世の志を、陶宗儀は該博な知識と深慮を、王彝は人をひきつける魔力を。筆者も筆者なりにその何かを読みとつてみたい。もつとも、宋濂の墓誌銘に、楊の奇行に対して、「晋人の高風有り」といつているように、それは、中国に昔からある「奇」の伝統に吸収される部分が多いであろうが、筆者はそこに新しい時代精神の息吹を見つきたい。そのために、少し回り道をして、今度は、「奇」の大極にある、楊のある種の「まじめさ」について、以下論述を進める。

「奇」や「狂」という語以外に、楊維楨を我々に印象づける者にはどのような語があるだろうか。

松村昂氏はその論「鐵と龍——楊維楨像にかんして——」（入矢教授小川教授 退休記念中国文学語学論集所収 一九七四 筑摩書房）で「鉄」と「竜」の二字に注目して、それぞれの語にまわりつく、彼の詩の非現実性（仙人の世界）と現実性（モラリストとしての側面）の分化発展と、「情性」への両者の統合を見られた。そして、その「情性」が続く明の文学や思想に中心的な役割をはたすであろうことを示唆された。

前野直彬氏は、「明七子の先聲——楊維楨の文学観について——」（中国文学報 第五冊 一九五五）で、明代の対立

する詩説である「格調説」と「性靈説」の二者の観点から、楊維禎の文学観をとりあげ、二者の微妙な調和のうちに楊維禎像をとらえられている。そして楊維禎の天分に属する「性靈」の部分の切り捨てた地点から、明七子の格調を重んじる詩が発生したであろうことを論ぜられる。

矛盾に満ちた楊維禎及びその作品を、相反する二つの概念で分析し、何とか文学史的に位置づけようというこれらの試みを筆者も襲うものである。

ところで、ここに一言しておきたいのは、本稿が楊維禎の伝記や彼に対する知人の評言などに重きを置いていることである。勿論、作品理解を第一にすべき文学論の本道から外れている。しかし、筆者は、元以後の所謂文人達は、作品以外のパフォーマンズも、一種の文学表現として同等に論ぜられるべきではないかと考える。複雑な人間関係の中でいかに個性を発揮するか、文人達が一種の演技者としてふるまい、それが知人達や見知らぬ人達に影響を与え、更に後世に語り伝えられ、一部は文学作品として結実する。文学史からも歴史学からも漏れてしまふ、それらパフォーマンスを論ずる立場が、切り開かれなしかと筆者は思うのである。法や理念や経済よりも、人間関係によつて成り立ち左右される場合の多い、中国を代表とする、いわば東洋的「ヒューマニズム」社会を分析するてだてではないであらうか。

墓誌銘や伝記等は、墓にへつらう面があるので、扱いに気をつけなければならないが、それでも、自伝よりは、当人の一般的评价を知らせてくれることが多い。これから楊維禎のきまじめさ、或いは秩序への愛の分析の道具としてとりあげる彼の作品「正統辯」は、彼の名を世に高らしめたものの一つであるにもかかわらず、彼の自伝（「鉄笛道人楊維禎自伝」「国朝献徵録」卷一一五所収）は隱遁自由の境地を述べるのに忙しく、「正統辯」の別名らしい、「三史統論五千言」の七字を著作として記すにとどまる。

この作品の発表は彼の一生の上で重大な事件のはずであった。宋濂の墓誌銘にいう。「是（肉親の喪）自り銓曹（官吏任命）に調せられざる者十年。会ま、詔有りて、遼・金・宋三史を修せしむ。君、正統辯千言を作る。大司徒歐陽文公玄之を読みて嘆じて曰く、百年の後、公論此に定まらん矣。將に薦めんとするも、又之を沮む者有り。」この作品の

おかげで時の宰相、歐陽玄にとりたてられ、中央政府入りできる寸前にまで来たのである。

楊維禎の、今行われている別集「東維子集」は、雑駁たる不完全なテキストで、この「正統辯」を載せない。我々が読みうるのは、「輟耕錄」巻三の「正統辯」の条に収めるもの、そして明初、文章家として宋濂と名を並べた貝瓊の別集「貝先生文集」巻二「鉄崖先生伝」に引用されるものである。いくらか、文字に異同があるが、伝写されるうちに脱誤があつたのであろうか。元中期以後の江南では、例えば、楊維禎のパトロンの顧阿瑛の如く、名士の文章を出版する、好事な富裕商人達が多く出現した。あつという間に彼の文章は広まったであらう。話は少しずれるが、明人都穆の「南濠話話」に次の記事をのせる。「松江の袁御史景文未だ仕えざる時、嘗て友人と楊廉夫に謁す。几上に白燕を詠む詩有るを見る。云う……。景文は素より詩を能くする者、因りて之に謂いて曰く、先生の此の詩は、殆ど未だ体物の妙を尽くさざる也。廉夫、以て然りと為さず。景文帰りて詩を作る。翌日、廉夫に呈す。云う……。廉夫詩を得て歎賞す。数紙に連書して、尽く坐客に散す。一時呼びて袁白燕と為すと云う。」袁景文を有名にした、白燕の詩の故事であるが、このように名士のサロンの情報は、即座に多くの人々の知るところとなつた。

楊維禎の門人であつた殷奎は、幼時に「正統辯」を読んで感激したという。「奎は幼歳自り窃かに三史正統の辯を読んで、千載の公は是れ先生の斯文に定まらんことを知る。是繇り益す其の書を求めて、手もて抄して口もて誦す。」（「強齋集」巻五「祭先師鉄崖楊先生文」）「窃かに」の一字にこだわれば、或いは、大つぴらに読んでならなかつたのかも知れないが、ともかく子供まで読んでいる程に知れ渡つてゐるわけだ。

史家が早に論じていることなので、簡単に「正統辯」が書かれた背景を述べると、中央政府において、宋遼金の三史が編まれるに際して、いずれの王朝が正統であるか、それぞれの王朝の末裔を中心に、正閏論争が戦わされた。その状況に対して、楊維禎は、決然、（南）宋こそが、正統であり、元がその正統を引き続いたことを主張したのである。この数千言の論の要点を、貝瓊は、「鉄崖先生大全集」の序で要領よくまとめている。「其の言は以為えらく、我が朝は当に宋の統を、世祖混一の日に於いて続ぐべし。当に遼を継ぎ金を継ぐに急ぐべからず。」そして、其の論は、「正大にして剗切」であり、「観る者は之を題し」といふ。

或いは、この「正統辯」の発表が、その後の彼の役人としての不遇につながったのかもしれないが、一方この論が、南宋の末裔である、江南の士大夫の間で、楊維禎の名を高らしめた要因の一つになったと思われる。

ただ、この文章が、世にもてはやされたのは、その内容によるだけではなく、その修辭の見事さにもよったであろう。明人葉盛の「水東日記」巻二四「正統辯」の条の記述によれば、楊維禎の他にも周以立という人が「正統辯」を奉上して、南宋の正統たることを論じたが容れられなかったという。同様の論がいくつか書かれたものと思われるが、ひとり楊のものが抜きん出たのである。

楊維禎は、「吁あや」という感嘆詞、「矣」や「爾のみ」等断定の気持を表す助詞、「乎」や「哉」等強い反語の気持を表す助詞を適所に用いて文章に強い調子を与え、該博な知識によつて、宋の正統にして、金・梁の正統ならざること、また元朝が宋朝を承けるべきことを、たたみこむように、主張する。その熱情に満ちた長広舌に読者は圧倒される。その一方、ユーモアに満ちた奇抜な表現にも満ちている。先に引用した貝瓊の要約した文も、楊維禎が表現すると次のようになる。「成周は文王の五十年、武王の十三年に急がずして、而も天下の大統を集す。則ち、我が元、又豈に、太祖開国五十年及び世祖十有七年に急いで、而も天下の大統を集さん哉。」ややこじつけの感のある論理をとうとうとまくしたてる。そして、責任のがれをする史官達に毒舌をあびせかける。「晋史は、唐に修せらるれば、則ち、宋史の修せらるるは、宜しく今日に在るべくして、譲る無し矣。而るを今日の君子は、又、公けを議して論定する者を以て自任せず。而して又諉いひが（いいのがれ）して曰く、公論を後の儒者に付さんと。吾知らず、後の儒者とは何の儒たるかを。此れ則ち余今日の君子の爲に之れ痛惜する也。」（先の貝瓊の「鉄崖先生大全集序」の末句が、きまり文句の「実に、代（世）の言を知る者に候つ有り」で終わっているのは、事情は違ふけれども苦笑される。）

このように楊維禎らしい、「奇」なる色彩を帯びた名文なのであるが、そこにもられている思想は、それこそ「正統」なきまじめなものであった。彼は、一生「奇」をつらぬいたが、一方「正統」でもって一生を終えたともいえる。自伝の冒頭にいう。「鉄崖道人なる者は、会稽の人。祖は関西の出也。」「関西の出」とは「関西の孔子」と呼ばれた後漢の学者楊震をさす。宋濂の墓誌銘に「漢の大尉震に裔出す」とある。うそかまことかわからぬが、少なくとも家伝

や族譜の上ではそうであつたらう。後漢の清流派として著名な自らの先祖を楊は意識せざるを得なかつたらう。貝瓊の伝によれば、「少くして穎悟字を好み、日に書数千言を記す。父宏は為に万巻楼を鉄崖山中に築き、楼上に讀書せ使む。性の顯^もならず怠たり易きを懼れ、梯を去り輓轡もて食を伝う。積むこと五年、經史百氏に貫穿し、老師と雖も及ばず。因りて鉄崖と号す。」宋濂の墓誌銘「稍や長じて師に従いて春秋説を授けらる。析辨刺幾(譏)を講ずること百十家を踰ゆ。大夫公(父)期するに重器を以てし、弱齡に至りて為に室を授けず。甬東に遊学せ俾む。廐馬に費さず。黄氏日鈔諸書を購いて以て帰る。大夫公驩びて曰く、此れ顧つて良馬より多ならず耶。躬ら為に装褫(装訂)し、之をして周覽せ使む。奉定丁卯(一三二七)春秋を用て進士の第に擢んでらる。」幼い時から猛勉強の日々であつた。特に、春秋学に専念したことが、後に「正統辯」を書くに至つた、彼の歴史意識を培つたであらう。また、南宋の学者で、程朱の学を講じた黄震の主要著作である「黄氏日鈔(抄)」を、旅費を節約して購つたことに注目したい。朱子学的な厳格なモラルの中で彼は育つたのであらう。恐らくは、早くから、朱子の歴史解釈の書である「資治通鑑綱目」に彼は目を通していた。「正統辯」はこの書をしばしば引用し、その論議のよつて立つところも多くはこの書であつたらしい。そして春秋の科目で、蒙古人支配下で始まつたばかりの科挙に合格した。この時、大都の大官、胡助が、やはり合格した、一族の胡允文が帰郷するのとともに、都を離れる楊維禎を送つた詩が残っている。(「純白齋類稿」卷四「送胡允文、楊廉夫、趙彦直登第帰趙」) その一節に「淵源は春秋の学、同に究む尊王の旨」とあつて彼らの立派さをほめたたえ、はげます。もつとも「一^{ひと}りには天台県を宰す、弦歌して山水を好む。」とあつて、これは経歴からいって楊維禎のことであるが、早くも彼の音楽や自然への耽溺が特徴的なこととして詠まれている。

やがて、若者達が彼を慕つて門下に集つた。彼等とだらしなく遊んだりもしただろうが、厳格な教師としての一面もあつたようである。門下生のひとり殷奎の先に引用した「先師鉄崖楊先生を祭る文」は以下のように続く。「至正戊子(一二四八)の歳に当たりにて先生の門に灑掃するを獲たり。一見の頃、此の子教う可し、吾之に經を授けんと謂う。春秋の大義は謹嚴を之れ訓教し(?)三伝の得失、日夕討論す。既に問^ひなれば、文章を為るを学ば使め、六籍より而下、孟子の辯、太史公の健、離騷の憂、韓愈の粹、直指して畢く陳べざるは莫し。之を博むるに万変の奇を以てし、而

して之を約するに一理の真を以てす。奨誘の過ぎたる、属望の厚きに至りては、則ち曰く、汝其れ大儒と為りて後に当に聞ゆること有るべしと。」先師を祭る文なので、冥業の記述がないのかも知れぬが、それにしても魅力ある教師像である。

そして、彼が杭州に赴任した頃に、朱子の「資治通鑑綱目」をつぐ「宋史綱目」の作成にとりかかり、松江に隠遁した頃にはほぼ完成したらしい。貝瓊の「筆議軒記」（貝先生全集巻四）にいう。「瓊、鉄崖楊公に従いて、銭唐に在りし時、公は遼金宋三史を讀みて慨然として、朱子義例を取りて宋史綱目を作る志有り。……尋いで兵変に値いて流離散処し、十五年を閲て復た雲間に会す。公又曰く、吾が宋史綱目は已に成書有り。中に又論ず可き者ありて、未だ敢えて出さざる也。」宋濂の墓誌銘によると、楊維禎の著作として「補正三史綱目」なる書があるが、この宋史綱目が発展したものであろうか。いづれにしても、遼金宋が並列した形ではなくて、あくまでも宋を正統として、他を副とした彼の朱子学的理念になつた書を作ろうとして、研究を続けていたにちがいない。

ここまでわざと議論を避けて来たのだが、この楊維禎の朱子学的な「正統」への執着は、本当に時のモンゴル皇帝を対象としていたのかいささか不安である。異民族の皇帝を戴くことは、朱子学的理念と衝突しないのだろうか。しかし今残る彼の詩文には、あからさまな反モンゴル性はないし、むしろ非漢民族との交渉がまみ見うけられる。「正統辯」には、南宋への愛着が感じられるが、それはあくまでもモンゴルの支配をうけた上で、江南のナシヨナリズムを主張する底のものに私は思える。ただ元末のいよいよ混乱が深まった時期になると、モンゴル皇帝の「正統」が彼の心の中でも怪しくなり始めて来たであろう。松村昂氏は、先の論文で、彼の楽府のいくつかには「英雄の登場への期待」が表明されているといわれる。

元末 張士誠がしばしば彼を招いたが、彼は応じなかつた。やがて明の革命がはじまる。老年の楊維禎には、もはや事態の変化に対する余力はなかつたろう。そこに、あらたなる「正統」の担い手 洪武帝が彼を召しよせようとする。明史巻二八五 楊維禎の本伝を引く。「洪武二年、太祖、諸儒を召して礼樂書を纂せしむ。維禎は前朝の老文学なるを以て、翰林詹同を遣わして幣を奉じて闕に詣らしむ。維禎謝して曰く『豈に老婦の將に木に就かんとして、而し

て再び嫁するを理せん者有らん邪」明年、復た有司を遣わして敦く促がさしむ。老客婦謡一章を賦して進御す。曰く、『皇帝吾が能くするを竭くせ。吾が能わざる所を強いざれば則ち可なり。否んば則ち海を蹈みて死する有る耳。』帝之を許す。安車を賜いて闕廷に詣らしむ。纂する所の叙例略ぼ定まり、則ち骸骨を乞う。帝其の志を成し、仍お安車を給いて山に還らしむ。史館青監の士、西門の外に相帳す。宋濂之に詩を送りて曰く、『君王の五色の詔を受けず、白衣もて宣せられて至り白衣もて還る。』蓋し之を高しとする也。家に抵りて卒す。年七十五。」

最後の「正統」に対すお勤めを果たして死んだのである。むろん彼の内心はわからぬ。横暴な皇帝に対す恐れでいっぱいであつたらうか。あるいは「正統」に再びめぐりあえて満足だつたらうか。

「老客婦謡」は、明の朱存理「珊瑚木難」巻八にその全文が載せられている。その直後に詹同の「老客婦伝」が続く。事の経緯がくわしく述べられている中に「安車を賜いて闕廷に詣らしむ。留まること百有二十日。礼文畢り、史統定まる。」とあつて明史の記述と少しちがう。「史統定まる」という表現が具体的に何を指すかは不明だが、楊維禎の数十年前の出世作「正統辯」が容易に思い出される。恐らく、元から明への「正統」の移動を確実ならしめたことを指すのであろう。例えば正しい礼法を明に伝えたというようにである。

宋濂が楊維禎に送つた詩も同じ巻に載せられている。今全文を引く。

「楊維禎の呉淞に帰るを送る

皓仙八十商山を起ち、喜びて動く天顔咫尺の間。一代の遼金は宋史に帰し、百年の礼楽は春宮に上る。帰心只憶う鱸魚膾、野性随うに懶し鴛鴦班。君王の五色の詔を受けず、白衣もて宣せられて至り白衣もて還る。宋濂」

「皓仙」や「野性」や「白衣」の如き、自由人楊維禎にふさわしい字句の中に「一代の遼金は宋史に帰す。」という固い字句がある。これも「正統辯」を意識していると考えねばなるまい。今元百年の礼楽を明に伝えたことによつて、完全に「正統」は明に移つた。漢民族王朝の明に移つた以上、宋が「正統」とみなされるのは必定。これからは宋の年号で遼金史は語られよう。「正統辯」で述べた君の希望はかなえられたのだ。

楊維禎が何を思つたかはともかく、外面上は「奇」たる一生と「正統」たる一生の両方を彼は全うしたことになる。

「正統辯」には後日談がある。時代は下つて再び異民族が「正統」を承けた清代の乾隆年間に「四庫全書」が編纂された。四庫全書所収「輟耕錄」(陶宗儀)の提要にいう。「惟だ、第三卷中に楊維禎の正統辯二千六百餘言を載す。大旨は元を以て南宋の統を承けしめんと欲して遼金を排斥す。……論を持すること殊に紕繆と爲す。……今此の條を刪る。」つまり、編纂官達は、滿州族の前身である全朝をけなす部分があるので氣をまわして削ろうとしたのだ。

これに対して乾隆帝は「館臣に命じて楊維禎の正統辯を録存せしむる諭」を出した。今提要の前に付されている。元を南宋に継がせるのは「論を持すること頗る正し。之を紕繆と謂うべからず。」いまや宋が正統たるは常識。「皇祖御批通鑑及び朕の向きに批する所の通鑑輯覽は俱に此れ(宋を元が継ぐこと)を以て論定す。」そして、こんなことまで皇帝はいう。「朕以為えらく、但だに輟耕錄中所載の楊維禎の「正統辯」は刪除するを必せざるのみならず、即ち楊維禎文集内にも亦た当に是の編を補録すべし。並びに此の論を各の卷首に載せよ。」というわけで、今四庫全書所収の楊維禎の「東維集」には、冒頭にこの論がおかれ、更に第一卷の前に首卷と名づけて「正統辯」を載せている。歐陽玄は「百年後公論は此に定まらん。」といったが、四百年以上たつても公論は楊維禎のいうとおりであった。文人達の「奇」の先駆者である楊維禎は「正統」においても先駆者であった。

さて、この「奇」と「正統」という相矛盾する性格を、いかに処理して楊維禎像を把握すればよいのか。いいかえれば、最も「文人的、自由人的」なものと、最も「道学的的」なものが、楊維禎の中に並存してあるのをどう解釈すればよいのか。

彼を文学史の中に位置づけようとする場合、モラルⅡ「道学者」の部分は捨象するのが穩当であろう。

福本雅一氏は「楊鉄崖樂府序説」(帝塚山大学紀要 第一輯 一九六四)で次のようにいわれる。

「要するに、鉄崖詩に於いて、その文学的成果こそが問題となるべきであつて、モラルを前面に据えて論ずることは、無意味であることを認めざるを得ない。」

明代より始まる文学至上主義の流れにつながるためにはなるほどこの立場をとらざるをえない。そして、楊の樂府

に多い、訓戒の作品に対して

「このような伝統的なモラルを称揚している作品は、概ね詩として秀れたものではないように感じられる。」と喝破され、次のように明言される。

「詩の中に見られる思想は、あくまでも結果であつて、目的ではない。それ故、道徳性を強調する意図の下に作られたものは、ポエジーも拘束され、萎縮したものとなつてしまふのも已むを得ない。」

ただ、筆者は、文学発展史の観点からはなれて、元以降現代に至る中国人の精神史を考へるうえで、自由人のようでありながら、どうしても「正統」や「モラル」や「伝統的価値」についてこだわらざるを得ない楊維楨の心のくまを觀察するのも無益ではないと信じてるのである。

ここで注目したいのは、彼の伝統的文学への執着である。彼の別集の名は「鉄崖古樂府」や「復古詩集」のごとく古えを強調するものがある。結果として、新奇な印象を讀者に与える天才と想像の奔放が彼の作品にみられるが、意図するところは古典の再発見ではなかつたかと筆者は考へるのである。

文学に新風をおこすつもりならば、新しい形式の文学に従事するのが最も有効である。ところが、これだけの自由人でありながら、彼はその気がないのである。それが端的にあらわれるのは、「金元詞」に彼の詞が一篇もおさめられておらず「金元散曲」には出処のうたがわしい散曲が一つだけおさめられていることである。

決してこの種の文学に理解がなかつたわけではない。というのは、散曲（当時は今樂府といった）のアンソロジーにいくつか序言をしたためているからである。

「周月湖今樂府序」（「東維子集」巻十一）にいう。「士大夫の今樂府を以て鳴る者、奇巧は、閔漢卿、庾吉甫、楊淡齋に如くは無く、豪爽は則ち馮海粟、滕玉霄の如き有り。蘊籍は則ち貫酸齋、馬昂文の如きあり。其の体裁は各の異り、宮商は相宣す。皆、絃竹に被らす可き者也。」この新しい形式の文学に造詣が深いことがわかる。そして立派な文学であることを認めている。

だが、全く賛成というわけではなくて「繼いで起こる者は枚挙す可からず。往々にして文采に泥む者は、音節を失

い、音節に諧うものは文采を虧く。之を兼ねる者は実に難き也。」そして、古典的価値観がなければならぬことを強調する。「夫れ詞曲は古詩の流に本づく。既に楽府を以て編に名づくれば、則ち宜しく、風雅餘韻の在るべし。」そして、今の散曲の往々にして浮薄なのを嘆く。「苟しくも専ら時変を逐つて俗趨を競い、自ら其の街談市諺の陋に流るるを知らざれば、夫の錦臙繡腑の懿しと為すを見ざる也。則ち何ぞ今の楽府に取らん。絃竹に被らす可き者ならん哉」そのようなものは存在価値はないという。

どうしても彼の頭の中では、流行曲よりも古楽府を上位におかなくてはすまなかつた。だがその魅力は理解できた。だから古楽府によってその魅力を出せるならば、散曲などは要らないと思つていたかもしれない。

「沈氏今楽府序」にいう。(東維子集卷十一)「或るひと問う、騷は以て弦に被らす可きか。曰く、騷は詩の流。詩以て弦にす可ければ、則ち騷其れ可ならざらんや。或いは曰う有り。騷は古今無くして、楽府は古今有るは何ぞや。曰く、騷の下れるを楽府と為せば、則ち亦た騷の今なり矣。然れども楽府は漢に出づ。以て古という可し。六朝より而下は皆今なり矣。士の是に操觚する者は、文墨の遊なる耳。」昔から今に近づくほどどんどん価値がさがるといふ「正統」な固定觀念が牢固として彼の頭の中にはある。そして、散曲などは遊びだという。特にがまんがならないのは、散曲が道德の役に立つという愚論だ。「其の声文を以て、君臣夫婦仙釈氏の典故を綴り、以て人の視聽を警しめ、癡兒女をして、古今の美悪成敗の勸懲有るを知ら使むるは則ち関庾氏の伝奇の変より出づ。或るいは以て治世の音と為す。則ち国を辱しむること甚し。」この言葉の背景には、我が古楽府こそ勸懲の役に立ち国のためになるのだ、俗な劇や曲などにその領分を犯されてたまるかという頑固さがあろう。このような考えである限り、彼の古楽府にモラルから離れた文学自体のすばらしさを求めるのは、僥幸であると思われる。しかし散曲にもよい作品があるということを認める感受性が彼にはあつた。それだけに散曲の流行に対する對抗意識は燃えあがつたものと思われる。「然れども嫫雅邪正豪俊鄙野は則ち亦た其の人品に随いて之を得。楊盧滕李馮賈馬白は、皆一代の詞伯にして、是に遊はざる能わず。」そして今楽府よりも、自分の主張する古楽府を学べといわんばかりのことを記す。「邇年以來、小葉俳輩の類、今楽府を以て自ら鳴り、往々にして街談市諺の鄙に流れ、漁樵歎乃にも之れ如かざる者有り。吾知らず又十年二十年の後其の

變じて何如と爲るかを。吳興の沈子厚氏は文史に通ず。善く古歌詩を爲る。間ま亦た樂府に遊ぶ。記す、余數十年前太湖上に客たるに、鉄龍引一章を賦す。子厚余に連和すること四章。皆鉄龍体に倣う。飄々然として雲を凌ぐ氣あり。心に已に之を異とす。」ところが今樂府の集なぞ持つて来やがってという氣持が裏にありさうである。

「沈生樂府序」も同様である。(東維集) 卷十一)「生は讀書強記。晋人の帖、南唐人の画に志有り。樂府は特だ其の餘なる耳。生の才を求むる者有れば、是を以て掩う勿れ。」自分を慕つて、今樂府の集に序を求めて来た若者に対して、今樂府をこのように腐しているのである。

このような楊維禎が詞曲を作るとはとても思えない。失われてしまったのではなく、それから作らなかつたのである。

こうした観点から見なおすと、楊維禎の詩に古樂府に限らず、古典に倣つたものが多いことも納得できる。例えば宮詞や香奩体や竹枝歌といった題があり、李商隱や杜甫や李白にならう旨の注がある。彼の詩は、よく李賀をまねたといわれる。この場合も唐詩の異端に興味があるというよりも、やはり過去の詩に学ぶという「正統」への愛着が強いものと思われる。

さてその「正統」と「新奇」の關係だが、筆者はこう考える。楊維禎はあくまでも「正統」にこだわり続けた。「正統」こそが、人間に美しい秩序を与えるものだと思つた。しかし昔の人間と今の人間とは違ふ。どうしても昔の秩序におさまらないものがあふれ出たのが「奇」ではないか、と。或いは、逆の見方をすれば、「奇」があふれてあふれてしょうがないのを、何とか正統で秩序づけようとかあがく姿が楊維禎の文学と人となりなのではないか。

そして、これは楊維禎に限らず、元末以後の中国人が共有した精神状態なのではないかという仮説を筆者は持つてゐる。宋のときよりも經濟や社会が何倍にも拡大したために、精神や情念も變質をはじめたのに、旧來の秩序で何とかまかしているが、どうしても奇妙なものが外にあふれ出てくる。はなはだ觀念的だが、そのような感觸を筆者はもつてゐるのである。

歴史学者宮崎市定氏はかつて「明は宋の繰返しである」と述べられた。(岩波全書「中国史」下 四四八頁)「自然の

地理環境があまり変化せず、文化の点においても、宋代にあまり進み過ぎた結果、その後はこれぞというほどの革命的な進歩がないからには、歴史は繰返しになつてしまふのは、むしろ当然の結果だと言えるかもしれない。」だが、私は表面的には繰返しでも、経済の拡大が人の気持を変えないではいられないと思う。そして、それは旧来の伝統的な方法で秩序づけようにもどうしてもはみ出さざるを得ないのではないか。宮崎氏も明代の文化に関して次の如く述べられる。「宋代では高名な文人学者が、政治家としても重要な地位について活躍した者が多いが」明代の文化は反つて官界遊泳に失敗して仕進に望みを絶ち、一介の市民として都会の塵の中に埋もれた、いわゆる市隱によつて推進された。」(前掲書 四八〇頁)そしてその例として、祝允明をあげて「この種の隱者は前代においてはその比を見ない。恐らくは明代に始まつた新しい生活様式なのであらう。」それが發展なのかどうかかわからないが、表面的な反復の下で、新奇な文化が生まれつつあつたのである。

以上のような観点から楊維禎の作品はよみ返せるのではないか。

例えば、社会批判の詩として評価されている「塩商行」(鉄崖古樂府卷二)をよんでみよう。「人生は万戸侯たるを願わず、但だ塩利の兩淮の頭たるを願う。人生は万金の宅を願わず、但だ塩商の千料舶を願う。大農は塩を課するに秋毫を析つのみ、凡そ民敢えて錐刀を争わず。塩商は本是れ賤家の子、独り王家と富豪を埒す。亭丁頭を焦がして海権を焼き、塩商手を洗つて運握を籌す。席に入る一囊三百斤、津を漕ぐ牛馬千蹄角。司綱法を改めて新河を開き、塩商力を添え誰何する莫し。大艘鉦鼓流れに順うて下り、檢制孰か官鉞を懸けん。吁嗟海王宝を愛しまず、夷吾之を策して伯道を成す。如何ぞ後世立法を敵しくするに、祇だ塩商に与えて富媼と成す。魯中の綺、蜀中の羅、塩を以て家を起す数多からず。只今誰か補わん貨殖伝、綺羅往往にして州県に甲なり。」

さて恐らくこの詩がもとづく白楽天の「塩商婦」を引く。

「塩商婦、金帛多し、田農と蚕績とを事とせず。南北東西家を失わず、風水を郷と為し船を家と為す。本是れ揚州小家の女、嫁し得たり西江の大商客。緑髪溜り去りて金釵多く、皓腕肥え来りて銀釧窄し。前に蒼頭を呼び後に婢を叱る。爾に問う、何に因つてか此くの如きを得たる。増は塩商と作りて十五年、州県に属せず天子に属す。毎年塩利の官に

入る時、少しく官家に入れ多く私に入る。官家利薄く私家厚し、塩鉄尚書は遠くして知らず。何ぞ況んや江頭魚米賤く、紅鱸黃橙香稻の飯、飽食濃粧施樓に倚る、両朶の紅腮花綻びんと欲す。塩商の婦、幸い有りて塩商に嫁す。終朝美飯食、終歲好衣裳。好衣美食來処有り。亦た須らく桑弘羊に慚愧すべし。桑弘羊、死すること己に久しきも、独り漢時のみならず今も亦た有り。」

「塩商婦」の方は、一人の女性の独白を通じてわかりやすく、じゅんじゅんと詠んでいるのに対して、「塩商行」の方は、楊維禎が、塩務の監督官をしたためでもあるが、たくさんの事柄がごだごだと並んで分かりにくい。だがこのごだごとした分かりにくさこそが、作者が作者の時代に感じた、塩商の現場の雰囲気だったのかも知れない。もはや「塩商婦」のような悠長な調子では現実には語れないのだ。そして楊自身もこの時代がわからなくなつて来ている。「如何んぞ後世立法を嚴にするに、祇だ塩商に与えて富媪と成らしむ」経済の拡大にともなう、交通や物資運搬の煩雑さ。それらが無意識のうちに、この詩のゴタゴタした飛躍に飛んだ出きばえに影響を与えているのだと筆者は思う。

楊維禎の詩文は、いくつかのものを除いて、その奇抜さはあまり評価されていないようだ。その幻想はあまりにひとりよがり、ついでいけないものを感じる。だがそれは当然なのである。その幻想は、まさに古典的な秩序からはみ出さざるを得なかった、とりとめもない断片なのだから。我々はその幻想の美しさではなく、その幻想の発生の裏にある、秩序だてられない苛立ちを読みとるべきなのではないか。

一方、「正統」の立場に立って訓戒を押しつけようとする詩も、結局は、その「正統」では秩序づけられないものが噴出して、論理が中途半端になったり、過激に走つたりして、これも失敗する。

だが、彼の詩文がもてはやされたということは、やはり彼と同じような人格が元末に多くあらわれたというところであろう。従来の形式では結局秩序づけられないのだけれども、この新しい状況を何とか秩序づけようとする試み。同じ悩みを抱く青年達はそこにひかれて表現手段を求めて彼の下に集まったのであろうか。

何にせよ、文人達の「奇」や「狂」が、社会的抑圧に対して自己を解放しようとする試みだというような単純な考え

方を筆者はもうできない。